



Tokyo Gakugei University Repository  
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	高麗末期から朝鮮初期における仏教の歴史的位相( 審査結果の要旨 )
Author(s)	加藤,裕人
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/145691">http://hdl.handle.net/2309/145691</a>
Publisher	
Rights	

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

朝鮮半島における仏教受容は、日本に先行する長い歴史のなかでさまざまな変遷を辿り、三国時代・統一新羅時代には国家鎮護の教えとして尊崇され、ついで高麗時代には首都開城をはじめとする各地に寺院が建立されただけでなく、仏教の年間行事が国家的祭祀として営まれた。寺院も田畑などの経済基盤だけでなく、建築、絵画、製紙、印刷などの広範な技術的能力をも包含した経営体へと成長し、飢民救済、旅人への宿所提供など、さまざまな社会的事業も営んでおり、さらに大蔵経の刊行が国家的事業として実施され、教学研究も高い水準にあったとされる。しかしその後、朝鮮王朝においては、儒教を国是としたために、寺院の田畑などは没収され、僧侶や出家者の数も厳しく制限されて多くの寺院は廃寺となり、仏教は衰微していった。というのが朝鮮半島での仏教の盛衰の、教科書的理解である。

本論文は、従来のこうした仏教・儒教二項対立的歴史理解そのものが朝鮮儒教、なかんずく性理学の論理であることを明らかにするところから始め、高麗末から朝鮮初における仏教の社会的・思想的位相を史実の全面にわたって明らかにしようと試みる。高麗の崇仏から朝鮮の排仏へという常識を下敷きとすることなく、そもそも君主が仏教を信仰するということが、国政の運営においてどのような意味を有するのか、という根本的な問いを發し、そこから、外付的な論理では掬いあげることのできなかつた史実のグラディエーションを描きとることに努めている。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

従来の朝鮮半島における仏教史研究が二項対立的歴史理解に陥ってきた理由は、上で述べたような儒教論理的特質を措けば、まず、実証的歴史学として史料的に扱いやすいという点から制度にかんする研究が主流にならざるをえず、さらには教学的立場から行われる思想・教学研究が仏教系大学などで進められるという接近方法の影響が勘案される。さらに今日においては、仏教はキリスト教などと並ぶ「宗教」の一つでしかなく、その社会的、文化的影響もまた限られたものとなっているからでもある。

以上の従来の研究方法に対する批判的見通しのもと、本研究は先ず当該研究対象に対する先行研究の批判的概観から書き起こされる(第一章)。19世紀末に叙述の形から始まる朝鮮仏教史研究は、20世紀初頭にまず宗教学、次いで歴史学研究の対象となり、総督府の調査事業の開始と朝鮮研究会の設立を経て高橋亨による最初の体系的成果を得るに至る。が、そこで提示された戦前における朝鮮時代の仏教史像は、主として思想・宗教的な儒仏対立の構図を描くいわゆる「排仏」の歴史であり、しかしそれは、当時の朝鮮半島における仏教の社会的な劣性の原因探求というバイアスが初めからかけられたものでしかなかった。

かかる戦前の研究史を受け、戦後最初の論考となった韓<sup>かん</sup>宇<sup>ゆう</sup>勗<sup>しん</sup>「麗<sup>れい</sup>末<sup>まつ</sup>鮮<sup>せん</sup>初<sup>しゅ</sup>の<sup>の</sup>仏教政策」は朝鮮前期の仏教史を「抑仏」と捉えている。以降、韓宇勗以外の専門家の不在という状況もあり、90年代から現在に至るまで「抑仏」は通説的見解の地位を占めることとなったが、韓宇勗が展開した「抑仏政策」の議論もまた、皇民化政策に範を取った土地国有論とマルクス主義的発展

段階論から導出される土地を媒介とする国家権力と寺院勢力との対立の構図を機械的に高麗・朝鮮に適用したものに過ぎない、という歴史学研究上の重大な問題を抱えてしまっている。

したがって現在の朝鮮前期仏教史研究には、改めて仏教およびそれにかかわる多様な思想や実態を、当時の社会的文化的脈絡のなかにおいて理解しようとする実証的な手法による全面的な再検討を経た上で、新たな歴史像を提示することが求められているのである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究は、上記先行研究の詳細な検討の他、各期について『高麗史』『高麗史節要』『太宗実録』等、主要原典資料（未邦訳）に丹念に当たり、周辺文献にも細かく目を通し、膨大な註として挙げている他、重要事項については、原文（中文）を引用し、私訳をつけながら論考を進めている。

具体的な解明対象としては、高麗末期の恭愍王、朝鮮初期の太宗という二人の国王を選び、彼らの事績を丹念に跡付けた。

本稿の章立ては以下のとおりである。

## **第一章 朝鮮前期仏教史に対する歴史学的研究の推移**

はじめに

1. 戦前における朝鮮前期仏教史研究の推移
2. 戦後における朝鮮前期仏教史研究の推移
3. 本稿の位置付け —「排仏」と「抑仏」を越えて—

## **第二章 高麗王朝の滅亡と「斥仏疏」の位相**

はじめに

1. 恭愍王代の史的変遷 —前半期—
2. 恭愍王代の史的変遷 —後半期—

## **第三章 朝鮮初期 太宗の「崇仏的行為」に対する再検討**

はじめに

1. 太祖の仏教崇信と太宗
2. 太祖の病・逝去と太宗
3. 孝を実践する在り方の一つとしての「崇仏的行為」
4. 「臣庶追薦の法」

## **第四章 朝鮮太宗の対仏教態度にかんする再検討**

はじめに

1. 即位当初の否定的見解と排斥的態度
2. 僧徒に対する態度の変化
3. 仏教に対する態度の変化

## **第五章 高麗末期から朝鮮建国期における僧徒と建築技術**

はじめに

1. 建築史の整理と工匠間技術伝達
2. 多包式移入と僧徒

### 3. 朝鮮建国期における土木營繕と僧徒

おわりに

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

前者、恭愍王は、元帝国のなかの附馬(元皇女の婿)国王という立場から成長し、元末の動乱と元明対立の渦中に身を置くことになる。その高麗国王の事績、統治理念の変容について加藤はたんねんに史実を解きほぐした。そして、高麗末における改革者と扱われている恭愍王は、実際にはなにを考え目指していたのか、天意と君主の徳の相関という儒教的観念が存在していたことを示すことで、新たな知見を提示している(第二章)。

後者、太宗は、朝鮮王朝第三代の国王であるが、熱心な仏教信徒であった父太祖、兄定宗とは異なり、自身が仏教信徒ではなかっただけでなく、いわゆる排仏、斥仏を強力に実施した国王と見られている。しかし、彼の事績をたんねんに調べることで、太宗の行ったことは、仏教一般をすべて否定、排撃したのではなく、太宗自身の構想していた社会秩序観が存在し、既存の仏教寺院と僧徒のあり方をそれに適合させていこうとしたのであったこと、そして、篤信な仏教徒であった父母への孝(朝鮮の儒教では孝が最優先の徳目であった)を実践するために仏事を行っていたと明らかにする(第三章、第四章)。

続く第五章では、朝鮮建国期における僧徒の建築技能に対する習熟という史実を手掛かりに、朝鮮半島への「多包式」建築様式の移入に焦点を当てて、従来労働力不足の補完等の観点で語られてきた朝鮮王朝初期における僧徒の土木營繕への使役の捉え方に異論を唱える。僧恵勤によって高麗に移入された「多包式」は、彼の教えとともに彼に師事する僧や門弟等に受け継がれ、師弟をはじめとする仏教的人間関係の中で共有される。この仏教的な人間関係は当時において俗人も包含しており、朝鮮建国後最初に行われた僧徒の土木營繕への赴役は、太祖李成桂が即位以前に築いていた僧徒との密な人間関係に基づいて行われたことを明らかにしている。

僧徒の土木營繕への赴役・使役は太祖～太宗期を通じてほぼ継続的に行われ、漢城を首都として機能させるための公的建造物は確実に拡充されていった。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

最後は建築史に目を転じるといふ斬新な転回により、抑仏という通説に覆い隠され、これまでの教理史研究や宗教制度史研究では捉えきれなかった、高麗末朝鮮初の仏教勢力の半島社会における生き生きとした姿をダイナミックに浮き彫りにして、朝鮮半島仏教史の新たな包括的な歴史像として提示することに加藤は成功している。

このような研究は、史実と思想史・理念史を切り結ばせ、これまで提示されていなかった高麗末から朝鮮初期の思想史的位相を史実の中で読み解くという作業であり、史料にたいする並はずれてたんねんな読み込み、同時代的な社会的文化的価値のなかでの理解という作業の成果であると評価できる。本研究科博士(学術)の学位に十分相応しいと、審査員全員の一致で認めるものである。